『姉弟（きょうだい）の布団』

作・演出　星　一

登場人物
・ナツミ
・アキオ
・ヒデオ

夫婦（ナツミ夫妻）の家のリビング。
正面に出入り口と隣にトイレがある。その近くに窓がある。
部屋には必要最低限のものしかなくダイニングテーブルと椅子が二脚、ノートパソコンを置いているデスクが一セットあるだけ。
あとは、キッチンとゴミ箱。その部屋に洋間のリビングに何故か不自然に布団が敷いてある。
正面の出入り口の奥には玄関と寝室兼書斎がある。

誰もいないリビング。
しばらくすると、姉弟（ナツミ・アキオ）が聞こえる。
ナツミが少しだけ扉を開ける。

アキオ　俺はいいって言ったぞ。
ナツミ　なら、いいじゃない。

ナツミは部屋に入る。

アキオ　いいじゃないって・・・。
ナツミ　何。
アキオ　いや・・・。
ナツミ　何が言いたいの？

ナツミは窓に近づき、外を見る
アキオは開いた扉の外に立っているが、やがて、部屋に入り、ナツミを見る。

アキオ　俺は・・・つくづく可哀想に思うよ。
ナツミ　何が？・・・何言ってるのかわからない。

ナツミはダイニングの方の椅子に座る。

アキオ　ヒデオくん。
ナツミ　何・・・可哀想？
アキオ　そう。
ナツミ　どの口が・・・人の旦那、パシリに使って。
アキオ　あれは・・・行くって言ったから・・・。

アキオはデスクの方の椅子に座る。

ナツミ　ワガママ・・・。
アキオ　え？
ナツミ　ワガママ言うからじゃない。
アキオ　・・・姉ちゃんに言われたかない。
ナツミ　は？
アキオ　人のことよく言うぜ。

アキオはただデスクを見ている。

ナツミ　何？変な理由で行かせたくせに。
アキオ　変な理由って何だよ。
ナツミ　変じゃない、お腹痛いから、牛乳が飲みたいって・・・何それ？あの人、牛乳嫌いなんだからあるわけないじゃん。
アキオ　んなもん知らねえよ、腹痛くなったら飲むんだよ、俺は・・・昔っから・・・。
ナツミ　あんたが一番ワガママじゃない。
アキオ　何！？
ナツミ　昔っから謎だったけど何それ？・・・腹痛で牛乳を飲む・・・その納得のいく説明。

アキオは勢いの余り、立ち上がり、体で説明する。

アキオ　んなもん！腹痛くなって、牛乳飲んで・・・また痛くなって・・・出すんだよ。
ナツミ　状況悪くなってんじゃない。
アキオ　いいんだよ、俺はそうやって生きてきたんだから・・・。
ナツミ　そうやって、人にしれっとお願いするのよ、面倒なこと。
アキオ　・・・何が言いたいんだよ。
ナツミ　社長さんは偉そうですね。
アキオ　チッ・・・。

アキオは布団に近づく。

アキオ　あんたに言われたかないよ。
ナツミ　どう言うこと。

アキオは布団に向けて、

アキオ　可哀想、ヒデオくん。
ナツミ　何なのさっきから・・・ひとつもわからない。
アキオ　集中したいって・・・ここで寝かすのはさ・・・。

ナツミ　それは・・・。
アキオ　せめて、ソファベットとかさ・・・あるでしょ。
ナツミ　ここでいいって言うから・・・。
アキオ　でもさあ・・・。

アキオはデスクに座る。

アキオ　ここだってさ、仕事できるわけじゃない。
ナツミ　それはリビング用ってゆうか・・・。
アキオ　なんだよそれ、結局・・・
ナツミ　私だって言った！

ナツミは立ち上がり、扉の方を指差す。

ナツミ　あっちで寝ていいって、でも全然、聞いてくれないから・・・。
アキオ　ならなんか・・・一緒に寝よ・・・とか・・・あるだろ。
ナツミ　・・・え？
アキオ　なんだよ・・・。
ナツミ　ひゃー！、言えない言えない、恥ずかしすぎて。
アキオ　そう言ってらんないでしょ・・・。
ナツミ　アンタ馬鹿じゃないの？
アキオ　夫婦間の、そういうの・・・あるだろ。
ナツミ　言えません。

間

アキオ　まあ・・・そういうもんか。
ナツミ　アンタにはわからない。

二人は布団を見る。

ナツミ　意地・・・じゃない？
アキオ　意地・・・ねえ・・・。
ナツミ　私のことサポートするぞって・・・その頑張りじゃない・・・。
アキオ　・・・よくこんなとこで寝れるな。
ナツミ　え？・・・何それ。
アキオ　いや・・・。
ナツミ　何それ・・・こんなとこでって・・・。
アキオ　でも・・・だって・・・。
ナツミ　可哀想だ何だ言って、何で否定するの。

ナツミは布団のそばに立つ。

アキオ　否定？
ナツミ　否定してるじゃない。
アキオ　否定なんかしてない。
ナツミ　じゃあ何、今の。
アキオ　単純に・・・よくこんなとこで寝れるなって。
ナツミ　頑張りだって言ってんのに、よくそんなこと・・・。
アキオ　いや、思うだろ、普通、誰だって。
ナツミ　あの人の頑張りなんだから、言わないでよ、簡単に。
アキオ　けっ・・・頑張りだか何だか言ってるけどさ・・・偉そうに。
ナツミ　偉そう？

アキオは扉の方に向かって立つ。

アキオ　有名小説家は仕事に集中したくて、寝室から追い出すんですね。
ナツミ　気つかってんでしょ！、私のために。
アキオ　引っ越せよ、家買えよ、人気あるんだろ。
ナツミ　まだそんな余裕ないし・・・気に入ってるから・・・この部屋。
アキオ　あっちとここしかないんだろ・・・買えよ、無理してでも。
ナツミ　じゃあ、あんた金出してよ。

ナツミはダイニングの椅子に座る。

アキオ　は？
ナツミ　あるでしょ、出してよ。
アキオ　いや、そうじゃなくてさ・・・。
ナツミ　そんなに言うなら出してよ！
アキオ　俺は！姉ちゃんに気つかって、こんなとこで寝て、飯とか作らせたりするのが不憫でならなくて可哀想だって言ってんの！・・・別に金の話なんかしてねえよ。
ナツミ　金の話じゃない・・・アンタが始めたくせに。
アキオ　チッ・・・わからねえなあ・・・。

アキオはデスクの椅子に座る。

アキオ　チキショウ・・・腹痛えな。

ナツミは立ち上がり、扉に向かおうとする。

ナツミ　・・・胃薬持ってくる。
アキオ　いいよ。
ナツミ　何で、お腹痛いんでしょ？
アキオ　そうだけど・・・いいんだよ。
ナツミ　ワガママばっか・・・。
アキオ　牛乳じゃなきゃ・・・やなんだよ。
ナツミ　・・・子供じゃない。

ナツミはダイニングの椅子に座る。

アキオ　あ？
ナツミ　泣いてる子供と一緒。
アキオ　全然ちげえよ。
ナツミ　わんわん泣いて・・・それで自分の思い通りになる。
アキオ　うるせえなぁ！そうやってごちゃごちゃ！イラつかせてくるのもガキの頃と一緒だな。
ナツミ　何それ！？
アキオ　ようやく転職したっていうから、来たらこれだよ・・・。
ナツミ　何？
アキオ　あんた、人の優しさに漬け込んでて・・・

アキオは布団の方に体を向ける

アキオ　可哀想ですね。
ナツミ　よくゆう・・・。
アキオ　何だよ。
ナツミ　ヒデオのこと不安にさせてるくせに。

ナツミは立ち上がり、布団の近くに立つ。

アキオ　はあ？
ナツミ　電話が来るたびに言うの、アキオさんは僕のことをどう思ってるんですかって。
アキオ　何だよそれ・・・。
ナツミ　アンタからの電話でビクビクしてる。
アキオ　何だよ・・・ワケわからねえよ。
ナツミ　アンタに嫌われてるって思ってるんじゃないの？
アキオ　何で？
ナツミ　会社辞めて、転職しようって時、してきたじゃない、電話、大丈夫なのか・・・？って何度も。
アキオ　誤解だろ・・・。
ナツミ　そうかな。

アキオ　誤解だろ！？
ナツミ　誤解・・・だろうけど・・・。

ナツミはダイニングの椅子に座る。

アキオ　けど何だよ。
ナツミ　・・・やってること無茶苦茶だから。
アキオ　俺は大丈夫なのかって聞いてるだけだろ、心配だから。
ナツミ　プレッシャーになってる。
アキオ　何だよそれ。
ナツミ　社長さんにはわからないでしょ、社員の気持ちは。
アキオ　いや、別に俺は・・・社長つったってそんな大したあれじゃねえし・・・関係ないだろ。
ナツミ　社長は社長じゃない。
アキオ　何でだよ。
ナツミ　私にはワガママな弟にしか見えない。
アキオ　何だよそれ・・・わかんねえなあ・・・。

アキオはポケットからタバコを探し出して、吸おうとする。

ナツミ　ちょっと。
アキオ　あれ・・・。
ナツミ　禁煙。
アキオ　え？
ナツミ　禁煙だって・・・。
アキオ　ねえよ。

アキオは空箱を潰して、机に置く。

アキオ　チキショ・・・。

アキオは扉の方に行く。

アキオ　牛乳買ってくるだけでどんだけ時間かかってんだよ・・・。
ナツミ　何それ。
アキオ　え。
ナツミ　やっぱりプレッシャーかけてるじゃない。
アキオ　いや、俺は・・・かけてねえだろ。

アキオは窓に近づく。

ナツミ　わかんないのよ・・・そうやって肩身を狭くさせられてる人の気持ち。

アキオは外を見ている。

アキオ　・・・コンビニ近かったから。
ナツミ　コンビニ近かったら何？・・・牛乳、買うの遅れちゃダメってわけ？
アキオ　そうは言ってないだろ。
ナツミ　そう言ってるじゃない。
アキオ　言ってねえよ。
ナツミ　何かあったかもしれないのに・・・そう言ってる、アンタは。
アキオ　だから・・・その何かあったかもしれない心配を込めて、言ったんだろ。
ナツミ　使えない社員みたいに言ってたくせに・・・。
アキオ　だから言ってないだろ！！

アキオはナツミに詰め寄る。

アキオ　俺のは心配だろ？心配だって！姉ちゃんがそんなんだから・・・。
ナツミ　私が何？あの人に心配させてるの？
アキオ　仕事場とか家とか新しい部屋探せばいいものを、こんなとこに寝かせて、家事やらせて、アンタは自由に小説書いてるからいいさ・・・ヒデオくんはそのために色々我慢して肩身の狭い思いしてるんだろ？転職だって・・・アンタのサポートしたいから、したんだろ？

ナツミは立ち上がり、アキオから距離を取る。

ナツミ　それは・・・私のためって言うから・・・。
アキオ　それがワガママなんだろ？
ナツミ　私だって集中したいし、それで・・・お金が入ってくるんだから。
アキオ　そういうのが肩身狭くさせてるんじゃないか。
ナツミ　そんなの・・・アンタだってそうじゃない。
アキオ　それは・・・。

沈黙

アキオ　とにかく・・・俺は・・・アンタのワガママで心配してるんだよ。
ナツミ　心配心配って・・・便利な言葉。
アキオ　何だよ。
ナツミ　心配って言ってれば・・・親身に聞こえるじゃない。
アキオ　事実だろ。
ナツミ　どこが？
アキオ　チッ・・・。

アキオは窓に戻り、頭を掻いているとニヤリと笑う。

アキオ　・・・隣のやつ。
ナツミ　え・・・。
アキオ　あの本屋の・・・ヒデオくんの友達なんだろ。
ナツミ　何・・・急に・・・。

ナツミはアキオから背を向ける。

アキオ　どうなってんの。
ナツミ　どうって・・・どうもしない。
アキオ　どうもしないわけないだろ。
ナツミ　本当、何もない・・・。
アキオ　でも、ここ最近、頻繁に行ってるわけだろ。

アキオはナツミを見る。
アキオは窓を開ける。

ナツミ　それは・・・まあ・・・よく話したり・・・お茶入れてくれるから・・・。
アキオ　ヒデオくん。

ナツミはアキオを睨む。が、アキオは窓の外を見ている。

ナツミ　アキオ・・・。
アキオ　まあでも・・・実際、ヒデオくん頻繁に行ってるワケなんだろ？
ナツミ　だから・・・ヒデオは・・・誤解してる・・・。
アキオ　だとしたら・・・誤解は・・・アンタからきてるんじゃないのか？
ナツミ　何で・・・。
アキオ　そうだろ。
ナツミ　・・・。
アキオ　可哀想だよ・・・。
ナツミ　何が。
アキオ　可哀想。
ナツミ　可哀想可哀想って・・・何様？私の旦那じゃない。
アキオ　私のって・・・何か、ヒデオくんはものか？
ナツミ　え？
アキオ　あんたヒデオくんのことモノとしか思ってないだろ。
ナツミ　何言ってんの？
アキオ　そういう所がワガママだって言ってるんだろ。

ナツミは空箱をアキオに投げる。

アキオ　何だよ！
ナツミ　人んちの事情をゴチャゴチャと・・・。
アキオ　姉ちゃんのそういうところが心配にさせてるんだろ？
ナツミ　何？それで親身になってるつもり？
アキオ　ヒデオくんに何でもしてもらって、それで、アイツの友達にも手を出して、アンタやってることめちゃくちゃじゃないか！！
ナツミ　何！？何よ！？
アキオ　コキ使って、自分は隣の男とイチャついてんのか！
ナツミ　アンタだって！部下、連れ回して、迷惑かけてるくせに！
アキオ　それ、今関係ないだろ！！
ナツミ　アンタ、スケベのアキオって言われてるじゃない。
アキオ　関係ないだろ！！
ナツミ　自分んところの社員に手出してるくせに！
アキオ　俺は結婚してないからいいんだよ！！
ナツミ　アンタやってることめちゃくちゃ！！
アキオ　この野郎！

アキオはナツミに向かっていく、が、直前で止まる。

ナツミ　何！

ナツミは胸ぐらを掴む。

ナツミ　女だからって馬鹿にしてんのか！！
アキオ　ちげえよ。
ナツミ　なに！

ナツミはそのままアキオを布団の方まで押す。
アキオは布団の上に立つ。

アキオ　姉ちゃんと同じ血が入ってると思うと・・・ガッカリするよ。

ナツミは椅子に座り、俯く。

アキオ　俺の・・・親父の会社があったから・・・俺らあんまり不自由してこなかったろ・・・。
ナツミ　何が言いたいの？

アキオ　何でも買ってもらえて・・・姉ちゃんだって、あれ欲しい、これしたいって言ったら、何でもさせてくれたろ？
ナツミ　そうだけど・・・。
アキオ　だからだよ・・・俺は・・・ヒデオくんの気持ちわからねえからさ・・・。
ナツミ　・・・分かる。
アキオ　嘘つくな。
ナツミ　分かるよ！
アキオ　わかんねえよ！！

ナツミは視線を落とす。丁度、その先に布団に立っているアキオの足がある。

アキオ　わかんねえだろ・・・。

アキオはナツミを見ている。

ナツミ　わかろうとしてる・・・。
アキオ　・・・。
ナツミ　本当に・・・どういう人と過ごして、どういうこと考えてるのか・・・。
アキオ　・・・。
ナツミ　ハルキくんっていうの、本屋の・・・教えてもらった時は本当に嬉しかったし・・・。
アキオ　そう・・・。
ナツミ　私だって心配よ！あの人がああやって卑屈に優先してくれたら・・・嫌にならないかなって・・・心配になるでしょ！！ただでさえ歳、離れてるのに・・・。
アキオ　ごめん、悪かった・・・。
ナツミ　あの人が友達と遊ぶ時、何するのか、何喋るのか、気になるじゃない・・・知りたいのよ・・・私の知らないこと。
アキオ　それで、本屋に・・・？
ナツミ　それは・・・

ナツミはアキオが布団に立っていることに気づく。

ナツミ　ねえ・・・そこ。
アキオ　隣の、ハルキくん？会ってたのか？
ナツミ　ねえ・・・。
アキオ　そっか。
ナツミ　ねえ！
アキオ　何だよ。
ナツミ　そこ。

アキオは自分が布団の上に立っていることに気づく。

アキオ　ああ・・・ごめんごめん。
ナツミ　そう・・・誤解、全部。
アキオ　そう。
ナツミ　だから、誤解なの。あの人が本屋に行って確かめてるのは。
アキオ　わかったって。
ナツミ　何にもないの、誤解なの。
アキオ　わかったって！俺、わかったって言ったろ？
ナツミ　聞こえなかった。
アキオ　ちゃんと聞いてろよ・・・余計、怪しく聞こえるだろ。
ナツミ　何が？
アキオ　そうやって、誤解誤解って言われたら。
ナツミ　だから・・・。
アキオ　わかったって・・・。

沈黙

アキオ　おっせえなあ・・・。

ナツミはダイニングの椅子に座る。

アキオ　・・・なんかあったのかな。

アキオは窓から外を見る。

アキオ　コンビニ近いよな。
ナツミ　うん。

アキオは扉の方に向かう。

ナツミ　どこ行くの？
アキオ　見に行く。
ナツミ　待ってなよ。
アキオ　いくら何でも遅すぎるだろ。
ナツミ　何・・・。
アキオ　なんかあったかもしれないだろ？

アキオは出ようとする。

ヒデオの声　すいません。

アキオ　あれ・・・。
ナツミ　ほら・・・。

ヒデオが入ってくる。

ヒデオ　すいません。
ナツミ　待ってなって言ってたでしょ。
ヒデオ　え？
アキオ　ああ・・・遅かったね。
ヒデオ　ああ、すいません。
アキオ　なんかあったの。
ヒデオ　あ、いや・・・。
アキオ　え？
ヒデオ　ちょっと無くて・・・。
アキオ　ああ・・・。

ヒデオは牛乳を出す。

ヒデオ　ちっちゃいのしか・・・。
アキオ　ああ・・・いいよ。
ヒデオ　あ・・・コップ。
アキオ　いいよ。

アキオは牛乳を手に取り、ダイニングの椅子に座る。

アキオ　このままいくから。
ヒデオ　すいません。
アキオ　いいって。

アキオは牛乳を飲みほす。
ヒデオは妙にそれを見ている。

アキオ　え？
ヒデオ　いえ・・・あ、仕事は？
ナツミ　え？
ヒデオ　仕事。
ナツミ　ああ、大丈夫だから。
ヒデオ　そう。
アキオ　ありがとう。
ヒデオ　いえ・・・。

ヒデオは空の牛乳を受け取り、台所に置く。

ヒデオ　すいません・・・牛乳がなくて、意外と。
アキオ　悪いね、行かせちゃって。
ナツミ　本当に・・・。
アキオ　チッ・・・にしても遅かったね。

ヒデオは止まる。

ナツミ　何言ってるの？
アキオ　いや、別に・・・。
ヒデオ　す、すみません・・・近くのだとなくて・・・。
ナツミ　やめてよ。
アキオ　いや、隣にいる気がしたからさ・・・。
ナツミ　え・・・。
アキオ　本屋・・・友達なんでしょ。
ナツミ　やめてって・・・。
アキオ　どうなの？

ヒデオは振り返り、ナツミを見ている。

ヒデオ　いや・・・本当・・・牛乳なかったんですよ・・・全然・・・コンビニって意外とないんですね。

アキオは黙ってヒデオを見ている。

ヒデオ　いや・・・本当・・・。
ナツミ　言いたいことがあるなら・・・。
アキオ　あーキタキタ！！

アキオはトイレに走る。

アキオ　借りる！

ヒデオはトイレを見ている。

ヒデオ　本当に調子悪かったんだ・・・。
ナツミ　ああ・・・アキオって、ああなの・・・ごめん。
ヒデオ　・・・大丈夫。

ヒデオはデスクの方の椅子に座る。

ヒデオ　何か言ってた？
ナツミ　え？
ヒデオ　僕のこと・・・。
ナツミ　別に・・・。
ヒデオ　そう・・・。
ナツミ　別に何も思ってない。
ヒデオ　え？
ナツミ　何も思ってないって・・・。
ヒデオ　そうかな。
ナツミ　気にしすぎ。
ヒデオ　・・・相応しくないってアキオさんに言われてる気がして。
ナツミ　相応しくない？
ヒデオ　君たち・・・いや、家族に？
ナツミ　そんなことないって。

ヒデオは台所に立つ。

ヒデオ　牛乳がないとかなんとか・・・。
ナツミ　だから気にしすぎなんだって。
ヒデオ　しょうがないよ！！牛乳嫌いなんだよ！！
ナツミ　ちょっと声。
ヒデオ　ごめん・・・。
アキオの声　うっ・・・ううう・・・。

ヒデオは台所に手をついて落ち込んでいる。
ナツミはヒデオを見ている。

ナツミ　座って。
ヒデオ　え。
ナツミ　ちょっと。

ナツミは机をトントンと叩く。
ヒデオはそこに座る。

ナツミ　気にしすぎ、何もかも。
ヒデオ　そんなことない。
ナツミ　気にしすぎ、アキオにも・・・私にも・・・。

ヒデオ　君には・・・集中して欲しいと思って・・・。
ナツミ　それはありがたい。
ヒデオ　近くで寝てたり、うろちょろしてたら・・・邪魔だろ。
ナツミ　邪魔じゃない。
ヒデオ　環境が大事なんだよ・・・。
ナツミ　邪魔じゃないの。

ヒデオは俯く。

ナツミ　夫婦なんだから・・・対等でしょ。
ヒデオ　対等・・・。

ヒデオは布団を見て、立ち上がる。

ヒデオ　ちょっと・・・変に考えすぎてる・・・。

ヒデオは自分の布団の近くに立つ。

ナツミ　そう・・・アキオだって兄弟なんだから・・・年上だけど弟なんだよ。
ヒデオ　うん・・・。

ヒデオは布団をじっと見て、布団を整える。

ナツミ　ごめんなさい・・・。
ヒデオ　僕はないよ・・・君みたいに・・・余裕・・・。
ナツミ　余裕？
ヒデオ　うん・・・僕は気にするんだよ・・・君は人気小説家で・・・アキオさんはご実家の社長で・・・気にするんだよ・・・。

ナツミはヒデオに近づく。

ナツミ　みんな家族のことでしょ・・・。
ヒデオ　だから、気にするんだろ！ないよ・・・そんな余裕・・・。
ナツミ　気にしないでよ・・・お願いだから・・・。
ヒデオ　他の女にだって、気にする余裕だってないよ・・・。
ナツミ　え？
ヒデオ　・・・何でもない。
ナツミ　何それ・・・。

トイレの音

アキオが出てくる。

アキオ　あ～スッキリした。
ナツミ　ねえ・・・。
アキオ　何。
ナツミ　私が何・・・？男と会ってるっていうの？
アキオ　何？
ナツミ　何にもない・・・。

ナツミはダイニングの方の椅子に座る。

アキオ　そう・・・。
ヒデオ　すみません。

アキオはタバコを探す。

アキオ　あれ・・・ねえ・・・。
ナツミ　何？
アキオ　タバコ。
ナツミ　え？
アキオ　あれ？・・・忘れた？
ナツミ　アンタさっき無くなったって・・・。
アキオ　ああ・・・そうか・・・チキショ・・・。

アキオは落ちた空箱を拾い、窓に手をつき、ヒデオの方を見る。
ヒデオはアキオと目があう。

ヒデオ　あ・・・買ってきます。
アキオ　え？
ヒデオ　何でしたっけ。
アキオ　いや、いいよ・・・。
ヒデオ　大丈夫ですよ。
アキオ　本当？悪いな・・・。
ナツミ　アキオ！
アキオ　え？

ナツミはアキオを見ている。

ナツミ　アンタ・・・。
ヒデオ　いいんだよ。

アキオ　いいの？
ヒデオ　いいですよ。
アキオ　じゃあ、これね。

アキオは空箱を見せる。

ヒデオ　これですね。

ヒデオは出て行こうとする。

アキオ　あ、お金。
ヒデオ　あとでいいですよ。
アキオ　じゃあ、牛乳のお金と一緒に渡すから。
ヒデオ　わかりました。

ヒデオはすぐ出ていく。

アキオ　俺はいいって言ったからな・・・。
ナツミ　わかった。
アキオ　いいって言ったからな。
ナツミ　やめてよ・・・言い訳がましい・・・。
アキオ　あんな風に来たら、断れねえよ。
ナツミ　断りなさいよ。
アキオ　無理だよ。
ナツミ　無理じゃないでしょ。
アキオ　失礼だろ？ヒデオくんに。
ナツミ　そうやって、こき使うの・・・アンタは。
アキオ　姉ちゃんにはわからねえよ。
ナツミ　アンタだって一緒でしょ。

アキオがデスクの方の椅子に座る。

アキオ　そうだな・・・。

ナツミは布団の近くに立つ。

アキオ　まあ・・・転職して・・・何事もないならいいか・・・。
ナツミ　うん・・・。
アキオ　変に気にしすぎだよな・・・。
ナツミ　そうね。

アキオ　ほら、弟ができたってさあ・・・兄貴だけど・・・。

ナツミは布団に寝る。

アキオ　何してんだよ。
ナツミ　分かるかなって・・・。
アキオ　え？
ナツミ　ヒデオのこと・・・。
アキオ　わかんねえだろ。

ナツミは天井を見ている。

ナツミ　固い。
アキオ　当たり前だろ。
ナツミ　寝づらい。
アキオ　畳じゃないしなあ。
ナツミ　・・・おばあちゃん家行った時のこと覚えてる？
アキオ　え？・・・うん。
ナツミ　夜、初めて畳で、布団で寝てさあ・・・なんかベットと違って・・・広く感じた。
アキオ　まあ・・・実際、広かったしな。
ナツミ　そうなんだけど・・・その、布団がどこまでも続いているような気がして。
アキオ　わからねえな。
ナツミ　いいよ・・・思い出しただけだから・・・。
アキオ　何だよそれ。
ナツミ　二人でおばあちゃん家に行ったら、分かるかな・・・ヒデオのこと・・・。
アキオ　さあ・・・。
ナツミ　私何言ってるんだろ・・・。

アキオは思い出したように腕時計を見る、そのあと窓の外を見る。

アキオ　何してんだ。
ナツミ　え。
アキオ　いるんだよ・・・あ、入ってった・・・。

ナツミは体を起こす。

ナツミ　どこに。
アキオ　本屋、隣の。
ナツミ　え・・・。
アキオ　行ったほうがいいかな・・・。

ナツミ　さあ・・・。
アキオ　いいよな。

アキオは扉の方を向いて動かない。

ナツミ　行かないの？
アキオ　え？
ナツミ　その、本屋に・・・。
アキオ　行こうとしてるだろ・・・。
ナツミ　ああ・・・。
アキオ　タバコ欲しいし・・・。

アキオは出ていく。

ナツミ　何それ・・・。

ナツミは立ち上がり、しばらく窓の外を見る。
ナツミはアキオとヒデオが去ったのを見計らって電話をかける。

ナツミ　もしもし・・・うん・・・あの人来てたでしょ・・・見えたから・・・何回も来てたでしょ？・・・そう・・・教えて・・・どんな話してたか・・・何で怒ってたか・・・教えてほしい・・・あなたのことも聞かせて・・・どう思ってるか・・・私も話すから・・・今は、言わないで・・・後で・・・楽しんでる？・・・私が？・・・楽しいよ・・・また後で・・・。

扉の先にはアキオが立っている。
アキオがニヤつきながら部屋に入る。
少し閉まる扉の向こうには人影が見える。
電話を切ったナツミは俯いてしまう。
タバコが落ちる音。
二人は扉を見る。
扉が閉まる。

終わり